

学校体育における武道教育を問い直す

- 「伝統的な行動の仕方」を中核的学習内容とした剣道の実践から -

中井隆司・岡本温子*・有馬一彦**・佐藤朗**

奈良教育大学保健体育講座(体育科教育学)

(平成21年5月7日受理)

Reflections on the Significance of the BUDO education through the KENDO practice in the lower secondary physical education

Takashi NAKAI, Atsuko OKAMOTO*, Kazuhiko ARIMA** and Akira SATO**

(Department of Physical Education, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received May 7, 2009)

Abstract

The purpose of this study was to develop the program for learning the way of traditional behavior in KENDO for the 2nd grade in the lower secondary physical education classes, and verify the products in this program. This program was developed for learning the way of traditional behavior based on the spirits of BUDO that is the etiquette, the mind of the consideration, the mutual prosperity, the self-restraint, the gratitude. In this teaching unit, the learning process and the products were measured in terms of physical education class evaluation by the attitude measurement, the learning notes written by the students and student learning behavior. For analyzing the student learning process and the products, four students were selected by the physical education class evaluation.

The main findings were as follows:

1) This teaching unit got a high physical education class evaluation by the attitude measurement and the students could understand the way of traditional behavior based on the spirits of BUDO by analyzing the learning notes.

2) However, it was explained that only the etiquette, the mutual prosperity and the self-restraint of the way of traditional behavior based on the spirits of BUDO could show as the behavior by analyzing the student learning behavior of the selected students.

3) These results suggest that this teaching unit has the ability for learning the way of traditional behavior based on the spirits of BUDO.

Key Words : The way of traditional behavior, BUDO education, learning products, The spirits of BUDO, develop the practice in the lower secondary physical education

キーワード : 伝統的な行動の仕方, 武道教育, 学習成果, 武道の精神, 中学校体育実践開発

1. 緒 言

採点競技であるフィギュアスケートや器械体操では、

演技中にジャンプや技が決まるとガッツポーズをしている姿をよく目にする。また、近年国際化が急速に進み、競技スポーツ「JUDO」として世界的に広がった日本の

お家芸柔道でも、一本が決まるとガッツポーズをして喜びを表現している。しかし、同じ武道である剣道では、例え一本が決まっても、ガッツポーズをすれば、その一本は取り消されてしまい、そればかりか、審判に対する過度なアピールや、相手に対する挑発は、審判の印象を悪くし、有効打突を示す旗が上がりにくくなることさえある。そのような行為は、近年では非常に珍しく、剣道を志す者の間で、否定されるべき行為として認識されている。同じように試合をして、また、同じ武道で、同じようにガッツポーズをしても、なぜ剣道だけが一本を取り消されてしまうのだろうか。ここに武道教育の意味を問い直す本研究の問題意識がある。

近年、科学技術の進歩、情報化、国際化、少子高齢化など、社会のめまぐるしい変化に対応して、学校教育に対する社会のニーズは多様化し、そのまなざしが変化することで、日本の教育は大きな転換期を迎えている。2006年12月22日に公布・施行された新しい教育基本法では、旧教育基本法にはなかった、「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という目標がはっきりと明記された。これらを達成するため、改訂学習指導要領でも保健体育分野で学習内容の完全な習得に向けて、その内容が大きく変化した。変更点として、保健体育の授業時間を小中学校で増加、中学校で武道必修化、選択制の実施学年の変更、全学年での体づくり運動の必修化、ボール運動・球技における戦術ベースへの分類、などが挙げられている。特に、は文部科学省の見解として、「武道の学習を通じて、我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるようにする（中略）」とし、2009年度の学習指導要領移行措置ですでに実施中である。

このような学校教育の改革は、これまでも行われており、武道教育においては1989年の学習指導要領改訂に伴い大きな転換期を迎えた。「我が国固有の文化としての特性を生かした指導」をするため、1958年から約30年間続いてきた「格技」という運動領域名が「武道」へと変更されたのである。そして、単に勝敗の結果を目指すのではなく、人間として望ましい自己の形成を重視するという武道の伝統的な考え方を理解し、それに基づく行動の仕方を尊重する態度の育成が重要であるとし、それらの習得の先に、文化と伝統を重んじる豊かな心を兼ね備えた人格が形成されるという視点から、「伝統的な行動の仕方」が学習内容である「態度」に新たに加わったのである。

この改定によって武道教育に対してどのような議論がされたのか、学習指導要領改訂後の1990年から現在に至る先行研究を概観してみると、坂上(1995)は、「楽しい武道は、道としての武道を否定することで成立し、道とし

ての武道の導入は、スポーツとしての武道を破壊する行為である。これは楽しい武道の基本的な理念を否定するものである」と述べ、伝統文化としての武道を否定的に捉えているのに対し、岸野(1993)は、「格技から武道へ剣道や柔道を総括する名称が変更されたことについて、単に戦前の武道への逆戻りではなく、歴史的反省の上に立った改称であり、新しい武道としての再出発である」と、「格技」から「武道」への運動領域名の改称を認め、杉山(1994)は、「伝統的な『道』を求める考え方、行動の仕方」が加えられ、我が国の伝統的な文化に気付き、ひいては理解できるということを期待している。また武道教育は武道での教育ではなく、武道の教育である」と、伝統文化としての武道が、学校体育で学ばれる価値を認め、その意義を論述している。また、授業実践、特に、剣道については、作道(1993)の「剣道上達論」や、宮本(1993)の「剣道の楽しさを学ぶ授業」などの技術に関するもの、身体活動としての剣道をどのようにして学ぶか、また指導するか、という内容がその多くを占め、中には、投げた小手をキャッチして、瞬発力を鍛えるような教材までもが「武道教育」として堂々と紹介されていた。学習指導要領改訂の意味である「我が国固有の文化としての特性を生かした指導」という視点での実践は、小山(1997)が実施した、「剣術から剣道、そしてKENDOへ」や、小山(2001)の「武道とは何か」という武道の意味を問い直す理論実践の他には、1990年以降、ほとんど認められなかった。

しかし、武道における「我が国固有の文化」とは、他のスポーツにはない、武道独特の精神文化、つまり武道の中核をなす「武道の精神」であり、これまで脈々と受け継がれてきた、戦う相手を尊重する心や、目上の人を敬う心、自らの弱さと闘い打ち勝とうとする心である。つまりこれなくしては、武道は武道でなくなってしまうのである。日本剣道連盟は、剣道の理念を「剣の理法の修練による人間形成の道である」とし、剣道という身体活動を手段として、その奥にある「武道の精神」を獲得することによる人間形成が目的であるという見解を述べている。このことを考えると、坂上のいうような、「伝統的な行動の仕方」を抜きにした剣道が、果たして「我が国固有の文化としての剣道」といえるのだろうか。また「楽しい武道」とは、一体子どもたちに何を与え、そして残し、学んだ結果が、将来子どもたちが何かを掴みかけとなるのであろうか。「伝統的な行動の仕方」を抜きにするということは、剣道で大切にされている「武道の精神」を抜きにするということと同じであり、名ばかりの武道が、学校体育で価値を問われるのである。

武道教育が見直されている現在、伝統文化の尊重、そして国を愛し、他国を尊重する態度の育成に、武道教育は大いに期待され、新たな転機を迎えている。「伝統的

な行動の仕方」が、学習指導要領上で「態度の内容」として位置付けられた以上、それらは学習可能なものであり、評価できるものであると捉えることができ、これまでの「身体活動としての剣道」ではなく、相手を思いやる心や尊重する態度、自分を取り巻く環境へ感謝する態度などを生徒が学習し獲得して、それらを日常生活や部活動の場面でも、社会的に望まれる行動として示すことができるようになることが、これからの武道教育に求められるとともに、果たすべき役割であると考えます。

では、これまでのような「身体活動としての剣道」の指導、また、坂上の述べる「楽しい武道」で、「我が国固有の文化としての剣道」を、世界に発信していけるような、真の国際人を育成することできるのだろうか。「楽しい」は子どもたちに確かな学力を残すだろうか。「伝統文化としての武道」が、学校体育に存在する意味、つまり武道で何を学ぶのか、学ぶ意味を再確認し、学んだ成果を確実に保障し、結果責任と説明責任を果たす実践の積み重ねこそが、新しい武道教育への期待に応えることになるのである。

そこで本研究は、武道必修化を目前に控え、武道でしか教えられない、学ぶことのできないものとは一体何であるのかを見つめ直し、武道が学校体育に存在する意味を立証し、武道教育の意味を問い直すことを目的として、1989年の学習指導要領改訂で新たに加わった「伝統的な行動の仕方」を中核に、「技能」、「思考・判断」を関連付けた剣道の実践プランを開発するとともに、その学習成果を検証しようというものである。この実践開発によって、剣道の技術の向上はもちろん、「我が国固有の文化としての剣道」がどのようなものであるか、全ての生徒が理解でき、その上で「伝統的な行動の仕方」を実践するとともに、そこから生み出されるさまざまな「武道の精神」と、各自の価値観等と照らし合わせ、行動の選択ができるようになって欲しいと考えた。

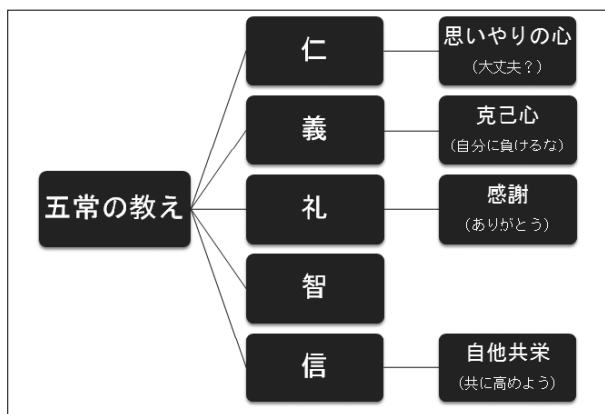


図1 五常の教えと武道の精神の関係

2. 研究方法

2.1. 対象授業と時期

対象授業は、奈良県下のN中学校で剣道歴10年、四段のO(大学4回生、22歳、女性)、教育実習生T(大学3回生、21歳、女性)、講師歴1年目のK教諭(24歳、男性)、教職歴12年目のS教諭(35歳、男性)、教職歴16年目のA教諭(38歳、男性)が共同で実施した中学2年生の1クラス(男子19名、女子19名、全体38名)の剣道の授業(8時間単元)である。なお、対象となった剣道の授業は、平成19年9月~10月に実施された。

2.2. 「伝統的な行動の仕方」を学習する剣道の実践開発

1989年の学習指導要領改訂により、これまでの「格技」から「武道」へと運動領域名が変更され、これにより新たに学習内容として、「伝統的な行動の仕方」に留意して、互いに相手を尊重し、計画的に練習や試合ができるようにするとともに、勝敗に対して公正な態度がとれるようにする」が書き加えられた。つまり、武道で学習する内容の中に「伝統的な行動の仕方」という「態度」の内容が組み込まれたのである。

しかし、運動領域名変更後1990年~2006年の先行研究及び授業実践(雑誌:体育科教育、楽しい体育・スポーツ、学校体育)を概観する限りでは「伝統的な行動の仕方」に重点を置いたもの少なく、「身体活動としての剣道」の授業実践がほとんどであった。杉山(1994)は、「伝統的な行動の仕方」を除いてしまえば、単なる格闘技ではない。武道であるためには、道を求める態度を支える内容が必要であり、それが『伝統的な行動の仕方』である」と述べている。では、なぜ、「伝統的な行動の仕方」を重視した実践が実践研究としてほとんど見うけられないのか。この原因として、「伝統的な行動の仕方」は何をもってどう評価するのか、また学校体育の限られた授業時間数の中で、何をどこまで教えられるのかという課題が、武道の精神的、文化的価値を置き去りにしているの

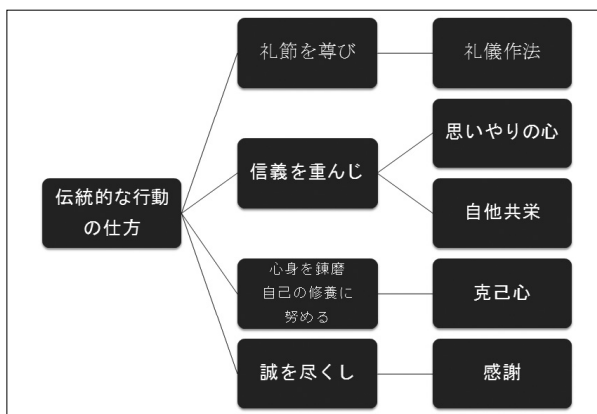


図2 伝統的な行動の仕方と武道の精神の関係

ではないかと考えられる。そこで本実践では、「伝統的な行動の仕方」を中核とした授業こそが、武道教育のあるべき姿であるという視点に立ち、「伝統的な行動の仕方」の習得に向け、剣道の実践開発を行った。

2.2.1. 学習内容の検討

学習指導要領が示す「伝統的な行動の仕方」を中核に、「技能」「思考・判断」を関連づけて学ぶために、本実践では、武道界でいう「武道の精神」を手がかりに剣道で脈々と受け継がれている「五常の教え」を元に「伝統的な行動の仕方」の学習内容を系統的に抽出した。

なお、「五常の教え」とは、中国の思想家、孔子（BC 551～479）の教えであり、仁：思いやりの心をもつこと、義：正しい行いをする、礼：豊かな心を示すこと、智：正しい判断をすること、信：周りの人から信頼されること、という教えである（図1）。これら5つの教えのうち、単元時間数と対象が中学生であるということとを考慮して、智を除く仁・義・礼・信の4つに重きをおき、それらが内包する「思いやりの心＝友達に対する大丈夫？という優しい心遣い」「自他共栄＝友達と共に高めようという考え方や行動」「克己心＝自分に厳しく、向上心のある考え方や行動」「感謝の心＝周囲へありがたいと思う考え方や行動」に「礼儀作法」を加えた5つを今回の授業実践で取り扱う「武道の精神」とした（図2）。学習指導要領に明記されている「伝統的な行動の仕方」とは、これまで剣道が脈々と受け継いできた行動の仕方であり、それらは「剣道を正しく真剣に学ぶことにより、心身を練磨し、旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて、礼節を尊び、信義を重んじ、誠を尽くし、常に自己の修養に努める。以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである」という剣道修練の心構えに記されているものであり、この中の、「心身を練磨し、旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて、礼節を尊び、信義を重んじ、誠を尽くし、常に自己の修養に努める」という部分が、剣道の「伝統的な行動の仕方」そのものであり、これらを身に付けることができれば、今回授業で取り扱う行動の仕方としての「礼儀作法」と、

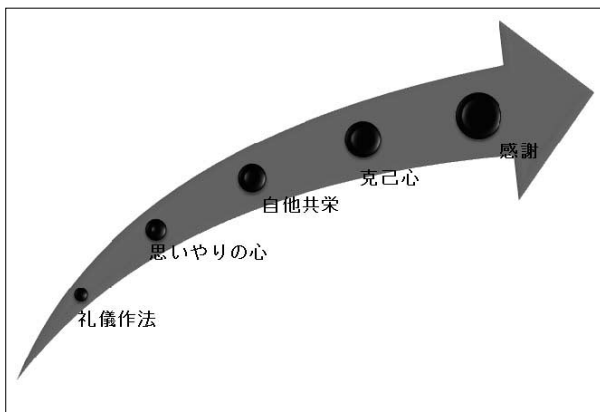


図3 学習の順序

その先に生まれたり感じたりする「武道の精神」、つまり「思いやりの心」「自他共栄の心」「克己心」「感謝」が身に付いたと考えることとした（図2）。

これら5つは図3で示すように、行動の仕方としての「礼儀作法」を理解した上で、竹刀で打突されることによって感じる自分の痛みから、「他人の痛みに関心、周囲への思いやりの心をもち」「痛みを乗り越えて共に稽古しようという自他共栄の心をもち」「もっと自分を高めようという克己心をもち」「自分を高めてくれる周囲へありがたいと思う感謝の心をもつ」という系統があると考え、以上の順序で学習することとした。

2.2.2. 学習方法の検討

本実践では、「伝統的な行動の仕方」を中心に学習するために、学習方法に以下の工夫を加えた。

体育館に「武士道」の掛け軸を掲げる（写真1）。

指示は和太鼓を使って行う（写真2）。

教師は道衣・袴・防具を着装する。

知識学習に重点を置き、毎時間の最後にプリントで



写真1 武士道の掛け軸



写真2 指示に使用した和太鼓

表 1 単元計画

		unit1		unit2			unit3		unit4
		1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目
ねらい		武道の伝統的な考え方を理解して、それに基づいた行動の仕方を身につける「関心・意欲・態度」 剣道を通して武道について学習し、武道の精神がどのようなものか理解できる「知識・理解」 伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重し、稽古や試合ができる「思考・判断」 剣道の基礎的な動きを身に付け、安全に留意して自分の能力に合った技を習得し、稽古や試合ができる「技能」							
学習内容		礼儀作法の形式、立ち合いの礼	防具の扱い方 面の着け方・取り方・しまい方	試合の仕方・試合に必要な基礎的な技術	試合進行の手順	試合に必要な発展的な技能	武道の精神とは何か		
		構え、踏返、足さばき、素振り	面の着け方・取り方・しまい方	本物の剣道がどのようなものか	審判の仕方	本物の剣道がどのようなものか	一本の基準		
		防具、竹刀、道場の扱い方	正面打ちの打ち方	思いやり的心・自他共栄とは何か	現在の自分の技量	克己心・感謝の心とは何か	単元を通しての自分の技量		
導入	5分	集合、挨拶、本時の学習内容の確認、準備	集合、挨拶、本時の学習内容の確認、準備、すり足見ごっこ	集合、挨拶、本時の学習内容の確認、準備、立会いの礼、踏返	集合、挨拶、本時の学習内容の確認、準備、立会いの礼、踏返	集合、挨拶、本時の学習内容の確認、準備、すり足見ごっこ	集合、挨拶、本時の学習内容の確認、準備、すり足見ごっこ		
	5分	剣道とはどのようなものか学習するためにイメージを膨らませる ・知っていることなどを発表する	面の着け方・取り方・しまい方の学習 ・面タオルは帽子型(台形シートを配布する) ・紐は毎回結ぶ ・紐のしまい方 ・最終的に5分で全員着けられるように	面着けの学習 10分以内に看ける	本物の剣道がどのようなものか知り、自他共栄心について理解し、感じるための特別ゲストとの試合 ・本物の剣道を見て、言葉では伝わりにくい雰囲気などを感じ取る	試合進行の説明	本物の剣道がどのようなものか知り、感謝の心、素直な心について理解し、感じるための特別ゲストとの形稽古 ・本物の剣道を見て、言葉では伝わりにくい雰囲気などを感じ取る	試合進行の説明	
	5分	礼儀作法の学習 ・黙想、左座右起、座礼、立礼		面打ちの学習 正面打ちの稽古	技の学習 正面打ちの稽古 相面稽古	面着けの学習 5分以内に看ける	技の学習 引き面の稽古 面、引き面の稽古	面着けの学習 5分以内に看ける	面着けの学習 5分以内に看ける
	5分	構え、足さばきの学習 ・構えは見本を見せて全体でやってみる ・踏み込み足を含む足さばきで陣取りゲーム(チーム対抗)	正面打ちの学習 正面素振りから面打ち 素振り	本時の学習のまとめ、確認 思いやり的心についてプリントで学習 思いやり的心	本時の学習のまとめ、確認 「自他共栄」の精神を紹介し共に剣道を学ぶ者同士のようにしたる高め合えるか考える 自他共栄	今ある力、今後の課題に気付くための試合 ・1分通し3本勝負の個人戦 ・各組の中で交替で審判に入り、1本の基準を満たしていると思えば自信をもって1本を取る ・試合者の待機場所が隣同士になるように設定する 素振り	本時の学習のまとめ、確認 克己心という言葉を紹介して、相手がどんな相手であれ、逃げずに立ち向かっていく強い心について考える 克己心	本時の学習のまとめ、確認 ・打って反骨打たれて感謝という言葉を紹介し、意味を考える(礼の形だけでよいのか) 感謝の心	まとめの試合 ・1分通し3本勝負の個人戦×2試合 ・各組の中で交替で審判に入り、試合終了後に判定を下す ・試合者は試合終了後にお互い好評し合うよう促す 素振り
	5分			本時の学習のまとめ、確認 ・試合の進め方の確認				剣道の授業を振り返るのまとめ、感想 ・前回の試合との比較・剣道を受講してからの変化・ガッツポーズの是非・8時間の剣道の授業を終えて、どんなことを学んだかを感じたりしたか・思いやり的心や感謝の心などいろいろなことを学んだが、武道の精神とはどんなものかと思うか	
まとめ	10分	本時の学習の確認 ・礼儀作法の確認 ・構え、足さばきの確認	本時の学習のまとめ、確認 ・面着けのポイントを確認 ・面打ちのポイントを確認	学習カードに記入、片づけ、終わりの挨拶					

「伝統的な行動の仕方」について学習する。
有段者の地稽古と形稽古を生で鑑賞させる。
NHKのクローズアップ関西で放送された「夢に向かって打て～隻腕剣士・高宮敏光さん」というビデオを上映し、主人公の強い精神力と、自分に負けない前向きな姿から克己の心を学びとってほしいと考え、筆者らが編集した映像を15分間鑑賞させる。

2.2.3. 学習過程の検討

- ・年間計画との関係から単元は8時間で構成する。
- ・単元の展開は複数時間で1つの学習課題を習得できるようにunitで構成する。
- ・基礎的段階、基本的段階、発展的段階、最終段階の4unitで展開し、unitが進むごとに系統的・発展的に学習ができるようにする。
- ・まとめの時間を十分に設定することで知識学習を重視することとし、これを本単元1つ目の目玉とする。
- ・毎時間の最後に心を落ち着かせる目的で、締め素振りを行う。
- ・unit2で行う試合は、今ある力を知り、次時からの学習につなげるための「試しの試合」とする。
- ・unit3から「伝統的な行動の仕方」をより深く学習する。
- ・前時の「伝統的な行動の仕方」に関する学習を次時で分かたり気付いたりできるように展開した。
- ・単元4～7時間目では、ゲストとの試合や稽古、ビデオの内容をまとめの時間と対応させ、より深く「武道

の精神」を理解できるようにした。これを本単元2つ目の目玉とした。

- ・unit2、unit4に試合を設定することで、生徒自身が精神面、技術面の発達を実感できるようにし、またその変化も分析の対象とする。

なお、本実践は探求的実践開発スタイルをとっているため、授業の進行に伴って改訂をし続け、最終的には表1に示した単元計画となった。

2.3. 資料収集と分析の手順

2.3.1. 授業評価の収集と分析

対象実践に対する生徒の評価を検討するために、高田ら(2000)によって開発された20項目からなる態度測定による体育授業評価を単元前後に実施し、「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として得点化し、各項目・次元及び20項目の合計点を算出し、中学生用授業評価尺度の診断基準に照らし合わせて、+、0、-の3段階で評価し、単元前後の変化を分析した。
なお、単元8時間目と毎時間のまとめの時間を利用して感想文を記入してもらい、授業評価の参考とした。

2.3.2. 学習カードによる生徒の知識・理解変容の分析

毎時間終了後に、本時の学習についてどのようなことが分かったか、授業を受けて今後どのような変化があるかなど、生徒の学習内容に対する理解を学習カード(表2)に記入してもらい、筆者らが作成した分析カテゴ

表2 学習カードの質問項目

時間	主な授業内容	質問1	質問2
1時間目	礼儀作法	剣道はスポーツか武道かどちらともか	剣道の試合でライバル選手に勝った瞬間とる行動は次のうちどれか 一本取った瞬間、「ヤッター！」と大きくガッツポーズ 無言でガッツポーズ 何もしない(喜びを表さない) 試合が終わってから相手に「ありがとう」を言いに行く
2時間目	面の着け方	礼儀作法や防具・竹刀等の扱い方など、剣道について学習を始めたが、何を感じましたか	これまで習ってきたことであなたの日常生活に変化がありそうですか
3時間目	思いやりの心	思いやりの心を学習し、今後の剣道の授業でどのようなことを意識しますか	思いやりの心を学習し今後の日常生活に変化がありそうですか
4時間目	自他共栄	自他共栄の心を学習し、今後の剣道の授業でどのようなことを意識しますか	自他共栄の心を学習し今後の日常生活に変化がありそうですか
5時間目	試合	試合をしてみて、技術面もしくは精神面でどのような課題が見つかりましたか	試合の時のことについて教えてください。 あなたの試合の結果と、その時の気持ちを教えてください。 あなたは勝敗が決まった時どんな行動をとりましたか？ その行動はなぜとったのですか？
6時間目	克己心	克己心を学習し、今後の剣道の授業でどのようなことを意識しますか	克己心を学習し今後の日常生活に変化がありそうですか
7時間目	感謝	感謝の心を学習し、今後の剣道の授業でどのようなことを意識しますか	感謝の心を学習し今後の日常生活に変化がありそうですか
8時間目	試合	剣道はスポーツか武道かどちらともか	剣道の試合でライバル選手に勝った瞬間とる行動は次のうちどれか 一本取った瞬間、「ヤッター！」と大きくガッツポーズ 無言でガッツポーズ 何もしない(喜びを表さない) 試合が終わってから相手に「ありがとう」を言いに行く

リーを元に分類することとした。カテゴリーの作成にあたって、「思いやりの心」を「大丈夫?」、「自他共栄」を「共に高めよう」、「克己心」を「自分に負けるな」、「感謝」を「ありがとう」という分かりやすい言葉に置き換え、その言葉に則した内容を記述しているかどうか、生徒がどのようなことを知識として理解したのかを分析した。なお分析は、剣道歴10年、四段のO（大学4回生、22歳、女性）と剣道歴9年、二段のS（大学3回生、21歳、男性）と剣道歴6年、三段のF（大学3回生、21歳、女性）の剣道経験者3人が個別に実施し、一致するまで協議を行った。

2.3.3 映像分析による抽出生徒の学習行動変容の分析

単元開始前に実施した態度測定による体育授業評価を用い、得点の高かった男女各一名（男子A、女子A）と、得点の低かった男女各一名（男子B、女子B）の合計4人を選出し、毎時間4台のビデオで抽出生徒の学習を撮影した。収録した抽出生徒の映像は、学習カードの分析基準を元に作成した映像の分析基準（表3）に基づき、「礼儀作法」「稽古中に出現する武道の精神」「試合の技術」の3カテゴリーで、その出現頻度を分析した。なお、分析はトレーニングを受けた剣道経験者3人（剣道歴10年、四段のO（大学4回生、22歳、女性）と、剣道歴9年、二段のS（大学3回生、21歳、男性）と、剣道歴10年、三段のT（大学2回生、21歳、男性））で実施し、事前・事後の分析者の一致率がともに80%をこえていることが確認されている。

2.3.4 統計解析

本研究における全ての統計解析の手続きはSPSS14.0 for Windowsに依り行った。

3. 結果と考察

3.1 態度測定による体育授業評価からみた本実践の評価

表4は、単元前後に実施した態度測定による体育授業評価の結果をクラス全体及び男女別に示したものである。この表から、総じて本実践は生徒に高く評価された授業であることがわかる。

本実践で特に重視した「まもる」「まなぶ」の2つの次元について具体的にみると、男女とも共通して数値が伸びたのが、「まもる」の次元、Q1「体育で、ゲームや競争をする時、ずるいことや卑劣なことをして勝とうとは思いません」であった。この結果から、生徒は対戦相手を尊重し、「思いやりの心」や「自他共栄」を大切にして礼儀作法を重視しながら授業を進めることができたということが考えられる。

一方、クラス全体として単元前後で低下したのが、「まもる」の次元、Q14「体育で、ゲームや競争で勝っても負けても素直に認めることができます」で、特に、女子が低下した。これは天井現象であるともいえるが、今回の実践では試合場面ではっきりと勝敗を決められなかったことが原因の一つではないかと考えられる。本来であれば、審判は一本の判断基準を明確にもっている者が立つのだが、今回はそれぞれの生徒に審判を任せ、一本の基準が不確かなまま試合を行ったことで、審判も試合者もどちらが勝ったのか、はっきりしないまま試合が終了してしまったという場面が多くみられた。一本の基準が明確になるには、技術の向上を必要とし、自分ができて初めて基準が明確になるという難しさがあるため、8時

表3 映像分析のカテゴリーと診断基準

カテゴリー	定義	診断基準				
				x		
稽古中に出現する武道の精神	思いやり	友達のことを大丈夫?と気遣ったりする心	友達が痛がっていたり、辛そうにしているのを大丈夫?と気遣ってあげている行動			
	自他共栄	友達と共に高められる様にするにはどうすれば良いか、また友達を助けようとする心	共に高めるためにために真剣勝負で稽古し、お互いに助け合う様な行動			
	克己心	自分に厳しく稽古に取り組みたり、人に頼らず粘り強く取り組もうとする心	自分に負けるなど、自分に厳しく粘り強く稽古する行動			
	感謝	周囲の人へありがたいと思う心や行動	試合や稽古後にありがたいと相手に言いに行くような行動			
礼儀作法	防具の扱い方	防具は身を守る大切なものであるため、粗末に扱ってはならない。	防具を持って移動する際は防具を引きずったり紐を垂らして移動したりせず、丁寧に持ち運ぶことができる。また着脱時にもまっとうに置いたり丁寧に扱うことができる。			
	竹刀の扱い方	竹刀は刀と同じ役割で、相手を切ったり自分の身を守るものであるため、武士の魂という考えから粗末に扱ってはならない。	竹刀をまたいだり、剣先を突いたりすることなく、丁寧に扱うことができる			
	正座・座礼・立礼の仕方	礼に始まり礼に終わるというように礼をする場面がたくさんある。また作法として形が決まっており、やるべき場面とやり方があるものである	教えた場面で教えたことが完璧にできる			
	立ち合いの礼	試合や稽古の始めと終わりに正々堂々と闘うという意味が込められた礼の仕方である。これにも礼の仕方があり、立礼や踏蹴などを一連の動作で行わなければならない	教えた通りに完璧にできる			
試合での技術	下半身	自然体での足の位置	両足は肩幅よりやや狭いくらいに開き、右足が左足よりも半歩前となるように構える。この足幅が狭すぎても広すぎても相手の攻撃に即座に反応することはできない	試合の最中に足幅、位置が崩れない	試合中、足幅、位置が崩れる	完全に間違っている
		すり足	常に右前左後の形で動き、足音がしない移動の仕方	試合中すり足ですずと移動できる	試合中すり足を忘れたり、足音がうるさい	ずつとすり足していない
		踏み込み足	面を打突する時の足の動きで、大きく一歩右足を踏み出し、かかとでドンと音を鳴らすとすぐに左足を引き付ける足の動き	打突時大きく右足で踏み込み、すぐに左足を引き付けている	打突時踏み込みが、左足を引き付けない、もしくは右足を下げている	常に踏み込まずに打つ
		引き足	右足のかかとで音を鳴らしすり足で素早く後退する足の動き	右足で踏み込んでスムーズに引き足で下がる事ができる	引き足を間違えることがあり、スムーズに下がれない	引き足の場面でも引き足で技を出さない
	上半身	竹刀の握り方	右手は鈎型、左手は柄頭を握る	正しい握りで竹刀を握っている	握る位置がずれている	左手が前になっている
		振りかぶりの大きさ	基本の正面打ちは振りかぶった腕の間から顔が見えるくらい大きく振りかぶって打つ	大きく振りかぶって打っている	振りは小さいが打っている	打たない、避けてばかり
	運動	打突の強さ	相手に打突時しっかりと打ち込んで、一本にできる	しっかりと打突して決めている	決めはないが強く打突している	触るように打っている
		下半身と上半身の運動	下半身、上半身の動きを運動させて打突することができる	足の踏み込みと打突が同時にできる	足と手が少しずれて打突している	どちらか一方が止まった状態でただ打突している
		試合態度	大きな声を出して真剣に闘っている	打突、攻めの発声ができている	発声が小さい、もしくはない	試合中どんな内容であっても会話をする
		審判	審判は試合者の真剣勝負を判定するわけであるから集中して真剣に審判しなければならない	集中して試合を見て、判定している	途中集中が切れたり、判定がいい加減	場に立っているだけで見ていない
審判基準	審判は公正に勝敗を判定しなければならない	試合内容を正しく判断して勝敗を決められている	判定は下すが勝敗の判断がぶれている(分析者と違う判定)	判定を下さない、わかっていない		

間の授業の中で、一本の基準をはっきりさせることは困難であったと感じている。また、一本の基準について明確にできなかったことで、特に、女子は一本の醍醐味や一本の美しさを感じないまま単元を終了しているということが推察され、その点では剣道の勝負の面白さを実感することができなかったのではないかと考える。

最後に、男女ともに数値があまり伸びなかったのが、「まなぶ」の次元、Q15「体育では、友達や先生が励ましてくれます」であった。映像分析の際に改めて授業を見直すことで、教師の生徒への関わり方が威圧的になっている場面が見うけられた。40人の生徒をマネジメントし、自らのねらいとする「伝統的な行動の仕方」を重視した授業を展開するという課題に教師は余裕がなくなり、生徒への対応の仕方に注意して授業を展開することができなかったことが大きな原因になっていると考える。この点で本実践は肯定的なムードに欠けていたといえ、生徒への関わり方の大切さを実感するものとなった。しかし、「できる」,「たのしむ」,「まもる」,「まなぶ」の全次元でプラスの評価が出ており、男女ともに単元を通して生徒に高く評価された授業であったといえる。

ちなみに、単元終了の8時間目に書いてもらった感想文では、生徒は総じて「武道の精神」は大切であり、武道だけでなく日常生活や、自らの所属する部活動でも活かしていきたいと記述していた。また、単元前に感じていた剣道への嫌悪感は単元後には薄れており、剣道を学習して良かったと記述している生徒がたくさんいた。

感想文の代表的な記述として「私は剣道を学習して剣道に触れ合えた事より、精神を学べたのが嬉しかった。4つの精神は私これから生きていく中で忘れてはいけない精神だと思う。4つの精神を忘れず心に留めながら生きて行こうと思った。私はテニスをしている。テニスにも4つの精神がよく当てはまる。授業の中で何回も胸がジーンとなった。ありがとうございました。」という内容であった。このことから、今回の実践で生徒が「伝統的な行動の仕方」を中核とした授業を高く評価し、本実践が授業として成立したということがいえる。

3.2. 学習カードへの記述からみた生徒の本実践への理解

次に、学習カードへの記述内容から、生徒の本実践の学習内容への理解度をみとめることにする。

まず最初に、表5は、実践の学習内容である「伝統的な行動の仕方」について学習カードの記入内容を分類・集計したものである。表中の数値は生徒が各授業時間の学習内容を理解した割合を示している。ここから「思いやりの心」が十分に理解できておらず、反対に「克己心」は最も理解度が高いという結果であった。「思いやりの心」は、「伝統的な行動の仕方」を学習し始めた単元1時間目であったことや、「強く叩いてはいけない」というような記述からみられたことから、剣道の醍醐味である「しっかりと強く打突して一本を決める」ということを多くの生徒が理解できていないようである。また、「自他

表4 本実践に対する「態度測定による体育授業評価」の結果

	全体						男子						女子					
	単元前		t 値	単元後		t 値	単元前		t 値	単元後		単元前		t 値	単元後			
	平均得点	標準偏差		平均得点	標準偏差		平均得点	標準偏差		平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差		平均得点	標準偏差		
できる	Q11 運動の有能感	1.83	0.82	-0.68	1.74	0.74	2.22	0.81	-0.83	2.06	0.80	1.41	0.62	0.00	1.41	0.51		
	Q7 できる自信	2.14	0.77	0.90	2.29	0.71	2.39	0.85	0.20	2.44	0.71	1.88	0.60	1.73	2.12	0.70		
	Q13 自発的運動	2.43	0.66	0.21	2.46	0.66	2.50	0.71	0.83	2.67	0.59	2.35	0.61	-0.62	2.24	0.66		
	Q17 授業前の気持ち	2.26	0.74	1.48	2.46	0.61	2.06	0.73	2.70*	2.56	0.62	2.47	0.72	-0.70	2.35	0.61		
	Q2 いろんな運動の上達 できる(運動目標)	2.26	0.78	2.10*	2.49	0.70	2.22	0.88	1.57	2.50	0.71	2.29	0.69	1.38	2.47	0.72		
たのしむ	Q3 楽しく勉強	2.57	0.56	0.77	2.66	0.48	2.61	0.61	0.62	2.72	0.46	2.53	0.51	0.44	2.59	0.51		
	Q16 練習時間	2.11	0.76	1.48	2.31	0.76	2.28	0.83	0.90	2.44	0.71	1.94	0.66	1.17	2.18	0.81		
	Q8 明るい雰囲気	2.40	0.60	0.23	2.43	0.66	2.39	0.61	0.57	2.50	0.71	2.41	0.62	-0.37	2.35	0.61		
	Q12 精一杯の運動	2.43	0.70	1.22	2.57	0.56	2.56	0.71	0.27	2.61	0.61	2.29	0.69	2.22*	2.53	0.51		
	Q5 丈夫な体 たのしむ(情意目標)	2.46	0.61	1.96	2.69	0.53	2.44	0.71	0.57	2.56	0.62	2.47	0.51	2.95**	2.82	0.39		
まもる	Q4 ルールを守る	2.83	0.51	0.27	2.86	0.49	2.72	0.67	1.00	2.89	0.47	2.94	0.24	-1.00	2.82	0.53		
	Q19 約束事を守る	2.74	0.44	0.63	2.80	0.41	2.78	0.43	-0.44	2.72	0.46	2.71	0.47	1.38	2.88	0.33		
	Q1 勝つための手段	2.66	0.68	2.59*	2.97	0.17	2.67	0.77	1.43	2.94	0.24	2.65	0.61	2.40*	3.00	0.00		
	Q18 自分勝手	2.69	0.53	0.57	2.74	0.56	2.56	0.62	1.37	2.72	0.78	2.82	0.39	-0.37	2.76	0.56		
	Q14 勝負を認める まもる(社会的行動目標)	2.91	0.37	-0.57	2.89	0.40	2.94	0.24	1.00	3.00	0.00	2.88	0.49	-1.46	2.76	0.56		
まなぶ	Q9 応援	2.51	0.70	1.36	2.71	0.57	2.39	0.78	0.89	2.61	0.70	2.65	0.61	1.14	2.82	0.39		
	Q20 積極的発言	1.74	0.85	1.72	2.00	0.73	1.83	0.86	1.23	2.11	0.76	1.65	0.86	1.17	1.88	0.70		
	Q6 作戦を立てる	2.20	0.76	1.66	2.46	0.74	2.22	0.88	0.83	2.39	0.78	2.18	0.64	1.46	2.53	0.72		
	Q10 他人を参考	2.51	0.78	1.49	2.74	0.61	2.11	0.90	1.33	2.50	0.79	2.94	0.24	1.00	3.00	0.00		
	Q15 友人・先生の励まし まなぶ(認識目標)	2.29	0.67	1.00	2.40	0.65	2.17	0.79	0.57	2.28	0.75	2.41	0.51	1.00	2.53	0.51		
総合評価	47.97(+)	7.03	2.37*	50.67(+)	5.57	48.06(+)	8.54	1.56	51.22(+)	6.42	47.88(+)	5.26	2.24*	50.06(+)	4.62			

(* p<0.5, ** p<0.1)

表5 学習内容への理解度

時間	伝統的な行動の仕方	男子	女子	全体
3時間目	思いやり	47.37	15.79	31.58
4時間目	自他共栄	68.42	63.16	65.79
6時間目	克己心	78.95	94.74	86.84
7時間目	感謝	36.84	68.42	52.63

※表中の数値は割合で示す

共栄」は男女とも6割を超える理解度を示していたが、残りの4割については「ふざげないで真剣に取り組みたい」というような記述で、それらは授業を受ける上で当然のことであるとし、「武道の精神」のどれにも当てはまらなと判断した。そして「克己心」は、導入で見せた片腕の剣士が自分のハンディをもるともせず、何事にも果敢に立ち向かっていくというビデオの内容が生徒の心に響き、理解を深めたのではないかと考える。最後に「感謝」は、「感謝」というキーワードを使っているものの、「いろいろと感謝しないといけないことがあるので気を付けようと思った」というような抽象的な記述が多く、本質を理解できていると思えないものについてはカウントしなかった。

次に、特徴的な質問項目について、その記述内容を個別にみると、単元1時間目と8時間目の質問項目である剣道は「武道かスポーツかどちらともか」という問い(図4)には、単元1時間目はほとんどの生徒が「武道」と回答したのに対し、単元8時間目では「どちらとも」という回答が多くなった。一見すると、学習内容とは逆の結果を示しているようだが、記述内容を具体的にみると、これは学習を進めるうちに武道で重んじている「武道の精神」が、武道だけのものではなく他のスポーツにも通ずる大切な精神であるという認識の変容があったものと解釈することができる。実際、抽出生徒

は単元1時間目に「先生が武道と言っていたから」と回答していたのが、単元8時間目では「礼儀を中心として日本で作られた武道」と回答しており、抽出生徒の中に剣道が武道である理由が確かに構築され、それを自分の言葉で説明できるまでに理解できたといえる。また、同じ時限に行った「ライバル選手に勝った場合の試合後の態度」についての問い(図5)には、単元1時間目は回答にばらつきがみられ、「武道の精神」について学習していないにも関わらず、約4割の生徒が「相手にありがとうを言いに行く」と回答していた。それに対し単元8時間目では約8割の生徒が「相手にありがとうを言いに行く」と回答しており、ガッツポーズをするという回答はなくなった。また、抽出生徒の記述をみても「ガッツポーズをしたら相手に悪い」と回答していることから、試合相手を尊重する態度がどのようなものであるか理解することができたといえる。最後に、単元2時間目以降に行った(5時間目は試合だったので行わなかった)授業を受けて日常生活に変化があるかどうか」という問い(図6)には、「武道の精神」の学習を開始した単元3

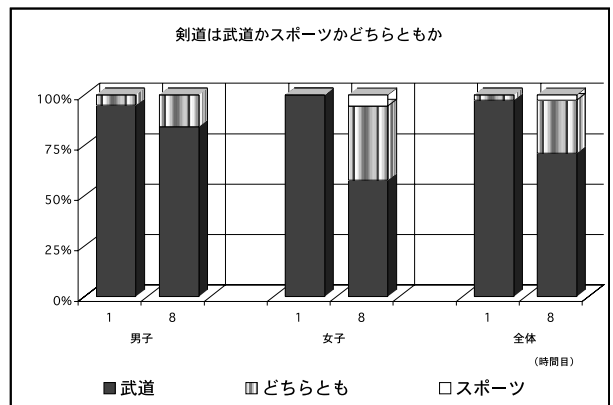


図4 剣道は武道かスポーツか

時間目以降で約8割の生徒が「変化がある」と答えており、生徒は「武道の精神」が剣道の授業だけに留まらず、その他の場面でも活かすことができると認識しているといえる。

以上のことから、学習カードの分析を通して、知識学習に重点をおいた本実践では、生徒は「武道」とはどのようなものであるかを学習し、それに基づく「伝統的な行動の仕方」を理解することができたと考えられる。この結果は、本実践開発の着眼点とその学習の必要性を改めて感じさせるものである。

3.3. 映像分析による抽出生徒の学習成果

図7～9は、本実践の学習内容である「伝統的な行動の仕方」が授業中の行動として生徒に表出するかを分析するために、収録した抽出生徒の映像を分析基準(表3)に基づき「礼儀作法」「稽古中に出現する武道の精神」「試合の技術」の3カテゴリーで分析したものである。なお、稽古中の礼儀作法を、
、
、
×で評価し、また、
を3点、
を2点、
×を1点としてグラフ化した。立ち合いの礼については、試合を実施した日のみであるので、グラフでの表示方法を変えて示した。

まず最初に「礼儀作法」について、その学習成果をみ

てみると(図7)、単元進行にともない「防具の扱い方」「竹刀の扱い方」「正座・座礼・立礼の仕方」が学習できていった様子をうかがうことができる。具体的な事例として、単元5時間目の初めての試合の日には、試合の進行に集中するあまり壁にもたれながらぐらをかいて試合を観戦したり、転がる竹刀を足で止めるなど、「礼儀作法」に注意できておらず全体的に評価が低くなったが、単元の後半はほとんど全てのカテゴリーで「伝統的な行動の仕方」に基づいた行動をとることができるようになり、立膝をしたり竹刀を乱雑に扱うような行動はみられなくなった。さらに、防具の扱い方が非常に丁寧になり、次に使う人が気持ちよく使えるように紐まで気を配って美しくしまうことができるようになっていた。また男子Bにおいては、単元前半と後半では歴然の差がみられ、どんな場面でも正座で座るようになったり立膝をする友達に注意するなど、周囲に良い影響を与え、クラスの中で模範的な態度を示しており、最も「礼儀作法」を身に付けることができた生徒であったといえる。

次に、「思いやりの心」「自他共栄」「克己心」「感謝」の4つの学習内容が授業経過と共に授業中の生徒の行動としてどのように出現するのかを分析した結果が図8である。その結果、「武道の精神」の「思いやりの心」「感

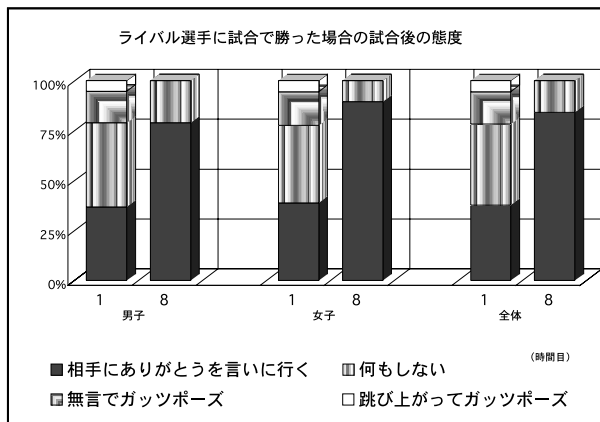


図5 ライバル選手に試合で勝った場合の態度

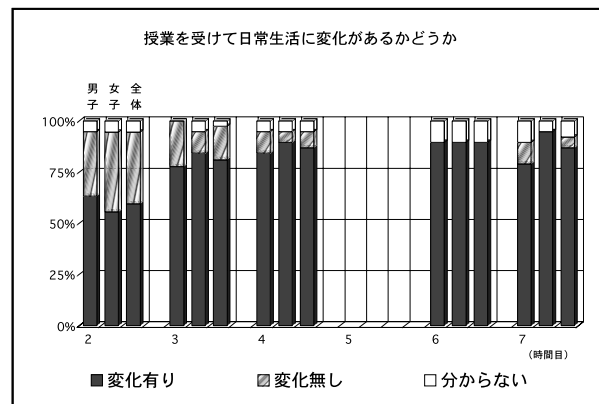


図6 日常生活の変化

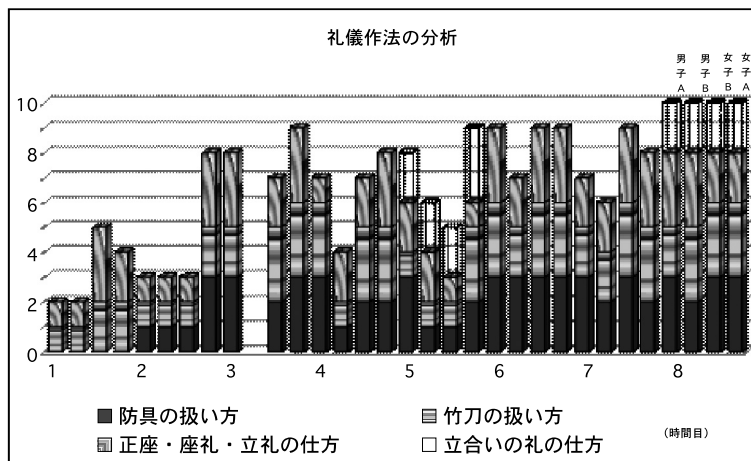


図7 抽出生徒の礼儀作法についての分析結果

謝」に分類される行動は認められなかったが、「自他共栄」「克己心」に分類される行動は出現していたことから、当初考えていた「思いやりの心」「自他共栄」「克己心」「感謝」と系統的に身に付けていくという仮説は立証できなかったが、「自他共栄」と「克己心」が生徒にとって学習しやすい「武道の精神」であるということがうかがえる。また、「武道の精神」を学習した時限と出現した時限に関連がみられないことや、出現した行動が「武道の精神」の一部であったことなどから考えて、本実践の8時間では学習時間が少なかったのではないかと考える。しかし、8時間という「武道の精神」を学習するには短い単元の中で、「自他共栄」と「克己心」に

分類される行動が出現したという事実は、学習時間の課題を克服することができれば、「武道の精神」は学習できるのではないかという可能性を感じさせる。また、これらの精神の出現は、生徒が確かに「武道」を学習した現れであり、その証であると考えている。特に4時間目に初めてゲストとの試合を見せた時の大爆笑した生徒の姿と、7時間目のゲストとの形稽古を見せた時の真剣に見つめる生徒の姿の変容ぶりは、筆者らを驚かせるとともに感動させた。

最後に、抽出生徒の試合技術を分析した結果(図6)、男子Bを除く抽出生徒3人は試合態度に向上がみられた。これは抽出生徒が対戦相手を尊重し、発声しながら真剣

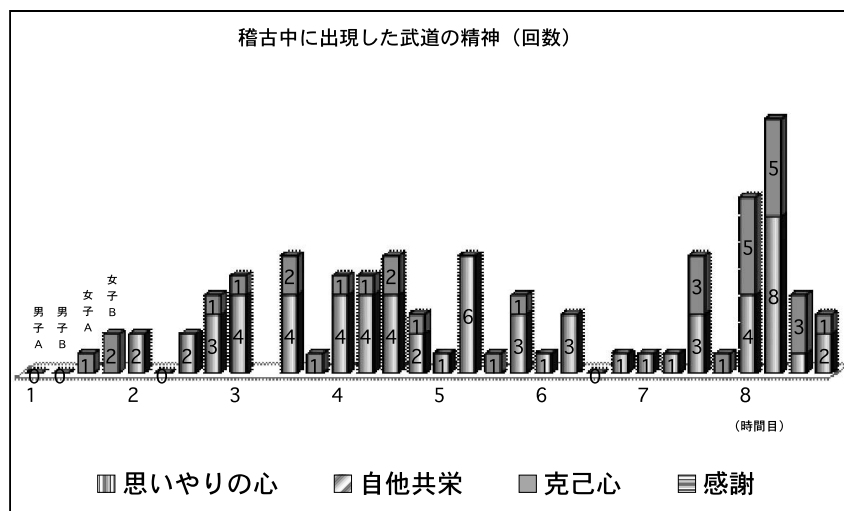


図8 抽出生徒の武道の精神についての分析結果

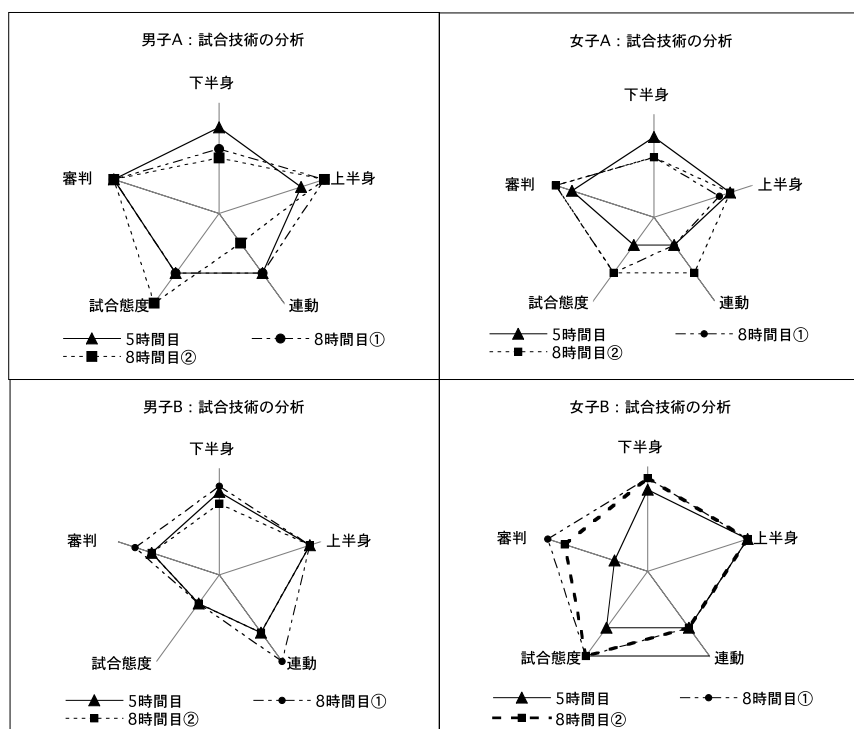


図9 抽出生徒の試合技術の習得過程

に試合をしていたことによるもので、2回目の試合がより活発に行われたことを表している。男子Bにおいては、試合中に対戦相手に注意したり、会話するような様子が両日でみられたので評価が低くなってしまった。また上半身や下半身、全身の連動はあまり向上しなかったが、一般的に技術の向上には、触るように打突できる 強く打突できる 技を使えるようになる 攻めの攻防ができるようになるという流れがあり、 単元5時間目より単元8時間目の方が活発に打ち合えるようになっていたことから、強く打突できるレベルまで技術を習得させることができたと考えられる。しかし、技術の向上に伴って感じられる「武道の精神」も向上するのではないかという予想は立証することができなかった。これは、本実践が知識学習を重視したことや、技術の向上が期待できるだけの十分な稽古量を確保できなかったことなどが一因ではないかと考える。

4. まとめ

本研究は、武道教育の意味を問い直すために1989年の学習指導要領改訂で新しく加わった「伝統的な行動の仕方」を中核に、「技能」、「思考・判断」を関連付けた剣道の実践プランを開発するとともに、その学習成果を検証しようと実施したものである。

分析対象は、「伝統的な行動の仕方」を学習内容の中核とし、「武道の精神」の視点から学習内容、学習方法、学習過程を工夫した1単元8時間からなる剣道の実践プランを作成し、N中学校2年生の男女38名を対象に実践したものである。本実践の授業評価と生徒の学習成果を検討するために、態度測定による体育授業評価及び感想文、学習カードの記述内容、抽出生徒を撮影した映像による「礼儀作法」、「武道の精神」、「試合技術と武道の精神の関係」の3点を分析した。

得られた結果は以下の通りである。

態度測定による体育授業評価から、クラス全体及び抽出生徒に高く評価された授業であったといえる。

学習カードの記述から、知識学習を重視した本実践で、生徒は知識として「武道の精神」を理解し、「伝統的な行動の仕方」を学習することができたといえる。

「礼儀作法」の習得から、単元を通して順調に学習することができたといえる。単元後半では、抽出生徒全員が自然に「礼儀作法」に基づく行動をとることができるようになっており、「礼儀作法」は8時間の単元で習得可能であるといえる。

「武道の精神」の習得から、生徒は「武道の精神」の一部を行動として理解し、出現させることができた。この結果から、今後の学習の可能性を感じるとともに、「武道の精神」の本質を理解し行動に移すまでには、長期間の学習が必要であるという示唆を得た。

「試合技術と武道の精神の関係」では関連性がみられなかったことから、「武道の精神」を理解し、それに基づく行動が取れるようになるには、稽古時間と「武道の精神」の学習時間がもっと必要であったと考える。

以上の結果から、今後の武道教育では、「伝統的な行動の仕方」を中核とした実践を開発し、それらを確実に身に付けられる学習課題、学習教材を創り、適切な学習時間を設定することが重要であるという示唆を得た。

また、今後の課題として、設定した学習内容を身に付けるための学習課題と学習の順序、設定した学習内容自体（「武道の精神」と規定したそれぞれの精神が学校体育で扱うのに適していたのか）、設定した学習内容を身に付けるために必要な単元の授業時間数、学校体育で剣道を学習するのに最適な対象、について再検討の必要性がある。本実践を通して得られた成果から、真の武道教育とは、これまでの剣道の授業実践で行われてきた身体活動としての剣道や、技術学習や楽しさ経験に重点を置いたチャンバラ学習ではなく、精神と技術の融合した「我が国固有の文化として剣道」の学習であり、その姿こそが学校体育に武道が存在する理由、学ぶ価値そのものなのであることを、この実践開発は示唆している。武道必修化に伴って真の武道教育としての剣道が追及され、多くの中学生が武道の神髄に触れることを期待している。

文献 (Reference)

- 小山吉明(1997) 剣術から剣道、そしてKENDOへ。体育科教育45(12): 50 - 52 .
- 小山吉明(2001) 武道とは何か。楽しい体育・スポーツ20(5): 16 - 19 .
- 岸野雄三(1993) 『格技』から「武道」の時代へ。体育科教育41(13): 9 .
- 宮本政明(1993) 剣道の楽しさを学ぶ授業。体育科教育41(13): 35 - 37 .
- 坂上康博(1995) 『楽しい武道』は継承されたのか。体育科教育43(1): 78 - 79 .
- 作道正夫(1993) 剣道上達論。体育科教育41(13): 38 - 40 .
- 杉山重利(1994) 『格技から武道』何が変わったか。体育科教育42(13): 42 - 44 .
- 高田俊也・岡沢祥訓・高橋健夫(2000) 態度測定による体育授業評価法の作成。スポーツ教育学研究20(1): 31 - 40 .